



JAPAN WORKERS' ALPINE FEDERATION

専門委員会活動報告

2022 6

○ 労山基金運営委員会

新潟県連安全登山教室の開催

昨年、「労山基金担当者説明会」を北信越の長野県・新潟県合同で開催しようとしたが、長野県連単独で実施した。そういう経緯もあって新潟県連理事長より「県連安全登山教室」のカリキュラムとして労山基金の説明をお願いしたいと連絡があったので、快諾して小池事務局長と今野委員が説明に行ってきた。

6月11日（土）午後1時から長岡市の「さいわいプラザ」で開催された。内容は一般会員向け労山基金三つ折りリーフを教材として、基金交付の実例、労山基金の改定内容について説明した。

新潟県連の特長は、会員組織数が249名に対して基金の加入者数が247名なのでほぼ全員加入しているといつてよい。また、今回の基金説明会にも全部の15会・クラブから25名が参加している県連である。見事な統制力のとれた組織である。新潟県連の2021年事故者は2名（249名中）、0.8%と少なく、県連内からの交付

申請は皆無だったと記憶している。

参加者からの興味ある質問は「何口の加入で幾らの交付金が支払われるか」であった。5口加入の場合で救助搜索費用や入院額を具体的に提示したほか、3人パーティでその内一人が未加入の事例についても説明した。また「救助搜索費用、出動した場合の日当について」無雪期の日当と積雪期の日当の違いや救助の支払い対象となるモノなどを説明した。全般的に実利的な内容の質問が多かった。

（今野善伸／労山基金運営委員）

○ ハイキング委員会

「ハイキングABC」の

改定作業頑張っている！

道央連盟の広域ハイキング委員より、活動内容のご報告。今年の課題は山筋GOGO体操の推進活動、秋の全国ハイキング交流集会などがあるが、今特に急務なのが、「ハイキングABC」の第5版改訂版の発行である。これを7月発行に間に合わせるために皆頑張っ

ている。特に新しく加わる内容として、登山中でのスマホ活用方法を大きく取り上げて改訂しようとしている点である。GPS機能の活用、天気の確認、写真の撮影などどんなアプリが活用できるのか。さらに予備バッテリーを持つ等々。スマホで現在地がわかり、しかもログが取れる。これは第4版には無かった画期的な改定内容だと思う。この改定作業を通じて私自身も情報共有ができ、また新たに実践してみようかな？と思ったりする事も多々ある。第5版が一日も早く全国の仲間へ届き、有効活用され、且つ安全登山に繋がればいいなと思っている。

（佐藤美知弥／全国ハイキング委員）

○ 自然保護委員会

ライチヨウ目撃情報活動を

自然保護憲章実践の中心に

労山自然保護憲章は2006年2月に生まれた。私としては第1章と第2章は大感動ものだ。第1章は山の自然の変化を登山しない人々に知らせる活動。第2章はローインパクト登山に努め山を守

る活動。昔、自然保護官と懇談の後、労山の自然保護活動は？との問いかけに第1章と第2章をさらに紹介すると保護官から妙に気に入られた。

第1章の代表的活動がライチョウ目撃情報活動と感ずる。去年より環境省ホームページ「いきものログ」欄に労山会員の皆さんから寄せられた情報を投稿している。投稿者名…日本勤労者山岳連盟

自然保護委員会 sawaとした。現在、投稿数144件中、労山の投稿は42件と他を圧倒している。山岳団体自然環境連絡会で他の会に「いきものログ」投稿を呼びかけている。粘り強く呼び掛けるとそのうち効果が出ることを期待する。

何年か前の自然保護集会で参加者にライチョウ目撃を問うとほとんどの方が目撃していた。しかし、労山に情報提供したか尋ねると誰一人してなかった。

労山会員の皆さん、一度「いきものログ」をのぞき、情報活動に参加してください。地味ですが立派な自然保護憲章第1章の実践で

す。

(澤村秋則／自然保護委員長)

○遭難対策部

現在まで五名の死亡事故が発生

5月12日から6月1日までに届いた事故一報は21件21名。

転倒が14名(無雪期10名、積雪期1名、山スキー3名)。転落が3名(無雪期2名、登攀1名)。落石が2名(登攀1名、沢登り1名)。体勢が2名(無雪期2名)。登山形態では、無雪期14名、積雪期1名、山スキー3名、登攀2名、沢登り1名。男性11名、女性10名。所属連盟は、道央・東京・兵庫が各3名、静岡が2名、道東・青森・茨城・埼玉・千葉・神奈川・岐阜・奈良・大阪・福岡が各1名。年齢は、40代5名、50代3名、60代5名、70代8名。

事故一報からは、下山中の転倒事故が21件中16件発生。転倒事故の報告は増加の傾向で、登攀・沢登りの落石や転落事故を省くとはば下山中に発生。注意すべきは下山中の足元であるが、注意しても足腰の衰えにより、滑る・躓くな

どバランスを崩す事が多くなっている。パーテイでは、お互いに注意を促し下山口まで気を抜かない対応が必要だ。

今年も暑い日が続く熱中症が心配される。夏の山登りは高温多湿環境での行動が多く、上手にリスクを捉えながら山へ向かう為には、普段からの体調管理や、暑さや湿度に徐々に体を慣らすことが必要だ。ウェアについても、吸湿性や通気性のある物を着用し、帽子を被り、また首を保護する等も大切だ。登山中の行動では、早い時期に異変に気付くこと。パーテイから遅れたり何でもない場所ですぐ、よろける等があれば、サインのひとつとして注意してほしい。応急手当や脱水症についても事前に学習する事が大切だ。さらに、前年は8月に低体温症での死亡事故が発生している。天候の急変で長時間風雨にさらされての行動は控えよう。

(石川昌／全国遭難対策部長)

※事故一報の一覧表は次ページを参照してください。